

防災だより

平成 25 年 4 月第 11 号

3 月 16 日 17 日の 2 日間、下田市役所の若手職員有志 10 名で、岩手県釜石市、山田町、大槌町を視察し、防災の取組や当時の様子について学んできました。

3/16 釜石市<説明者：ボランティアガイド藤井さん>

まず、最初に向かったのは、釜石市鶴住居地区です。「釜石の奇跡」と呼ばれる子どもたちの活躍があった地区です。子どもたちが「少しでも高いところへ」と順々に場所を変えながら、地域の人たちと避難した道を見ながら当時の様子について、話しを聞きました。

次に、鶴住居地区住民防災センターを見学しました。以前は高台に避難する防災訓練を行っていましたが、新しく住民防災センターができ、避難訓練の会場も住民防災センターになったことから、2011.3.11 当日も、多くの住民が高台ではなく、住民防災センターに向かって避難し、亡くなったそうです。なぜ屋上に上られるしっかりした階段を設置しなかったのか？なぜ、高台ではなくここで避難訓練をしたのか？「なぜ？」を考えても仕方がないとわかりながら、どうしても口からは「なぜ？」という言葉が出てしまうと話しておられました。



住民防災センター前



宝来館にて女将さんの話

3/17 釜石市「宝来館」<説明者：女将さん>

震災での経験を各地で語り伝える活動をしている女将さんは、出発の日の朝、お忙しい中時間を割いて、私たちの前で話をしてくれました。

『震災から 2 年が経過した。従業員も亡くなっており、今までは生々しく記憶が蘇り、宝来館前の海も見られなかった。しかし、このことを「伝えていくことが大事」と思い、語り部として活動している。明治・昭和の津波のときも宝来館前の海岸の砂は流されてなくなった。しかし、そのたびに再生して、きれいな砂浜に戻った。人が作ったものは壊れていくが、自然のもの

は必ず再生していく。子どもたちに海を嫌いにならないで欲しい。ずっと下の世代にこの自然を伝えて生きたい。そして悲劇を繰り返さないために、地域の住民で高台移転を決めた。子どもたちに夢を与えたい。夢を持ってもらいたい。みんなで助け合う町、ふるさとづくりをしたい。命があれば再生できる。何かを守られるのではなく、まず、自分で生き延びてください。』と。最後に女将さんが、「遠く静岡から、お金をかけてきてくださった皆様をお願いするのは本当に申し訳ないのですが、是非、1 つでもいいからお土産を買って帰ってください。」と言っていたのがとても印象的でした。



津波により大きな被害を受けた旧大樋町役場

庁舎機能が損なわれ、その後の様々な対応に大幅な遅れを生じた。被災した建物の保存については、「家族が働いていた、生きていた証として庁舎を残して欲しい」という家族や、反対に「家族が犠牲になったことを思い出してしまうから壊して欲しい」という家族など、方針決定に揺れていた。



避難所となった高台の公民館より

津波で流された町が燃え、徐々に山裾へ広がっていき、熱気が山の上まで伝わってきた。避難所となっている公民館には、燃料の入っていない発電機と50枚程度の毛布のみ。避難された住民だけでなく、対応した職員も不安になったと。



釜石市唐丹（とうに）地区にある石碑

地元小中学生の石碑に刻まれたメッセージ

- 「100回逃げて、100回来なくても、101回目も必ず逃げて」（中学2年、女子）
- 「悲しくて前を向くことができない時は、無理をせず横を向いてみてください。いつでも仲間や家族と一緒にいます」（中学3年、女子）
- 「つなみがきたらにげろを、むねにきざみ生きていこう」（小学4年、女子）
- 「津波なんかに人は負けない。仲間がいるから、津波なんかに絶対にまけない」（小学6年、男子）
- 「楽しい日々、大切なものが流れても、笑顔と友情はけっして流れない」（中学3年、男子）

●下田市津波避難訓練（平成25年3月11日）の参加人数

訓練実施地区	参加人数	人口(H25.3.1現在)	参加率
旧町内地区	1,048	5,572	18.8%
稲生沢地区	1,734	6,518	23.0%
吉佐美地区	1,175	4,241	27.7%
浜崎地区	556	2,896	19.2%
白浜地区	543	2,165	25.1%
合計	5,056	21,392	23.6%

東日本大震災では大津波により多くの方が犠牲となりましたが、日頃の教育・避難訓練が功を奏し、無事に助かった方もたくさんいます。避難訓練に参加することは難しいことはありません。

「100回逃げて、100回来なくても、101回目も必ず逃げて」（中学2年女子）、被災された方の言葉を忘れずに、大切な命・暮らしを守るため、できることから始めましょう。